

# 付加価値プリントを盛んに提案

## 大分県佐伯市・アートカラー

「これからの写真店はプリントを待つだけでなく、どんどん提案していかなくては」と語るのは大分県佐伯市の『アートカラー』神河秀子社長だ。

神河社長は4年間、写真店で働いた後、平成13年8月に独立してアートカラーを開店した。その際に「これからの写真店は画像処理ができなくては」と半年間、フォトショップを独学し、様々な付加価値プリントを提案している。その取り組みの中心にあるのがデジタルミニラボ『QSS-3202SD』だ。

ノーリツ鋼機との付き合いは、独立前のお店から(初のデジタル機である27型を使用)で、デジタルミニラボは32型で3台目となる。アートカラー開店と同時に導入した29型については「すごく良い機械で、証明写真がきれいだった。あそこに行けば証明写真はきれいでできるというイメージを持ってもらえた」と語る。今年1月に32型に入れ替えたのはデジカメプリント需要が増えてきていることを肌で感じたから。機械の志向として「フィルムとデジタルで半々」の29型から、よりデジタル処理能力の高い32型を導入することで、今後増えていくデジタル処理のために先行投資したかたちだ。

デジプリ比率は約40%。Lサイズ1枚30円で販売している。店頭受付機は『CT-2』1台で対応。昔は受付機があっても「デジカメできますか」と聞かれることが多々あったが、最近は受付機に直行するお客様が多いという。

証明写真については長年使用していた29型の色味に慣れていたため、ノー



アートカラーのサービス  
の柱であるQSS-32型

リツ鋼機の技術者に依頼して調整してもらい、画質にも、対応にも満足しているという。お客様からは導入してから「プリントがきれいになった」と反響があり「手応えを実感した」と語る。また他のアナログ写真店に対してデジカメプリント受注の営業をかけ、賛同してくれた店舗も複数あったという。



CT-2で対応

### きっかけは在庫整理

「三度の食事以外は常にパソコンに向かっていた」ことで身につけた画像処理技術は確かなもので、作業の中心となる写真修復、遺影写真の加工などの仕上がりには目を見張るものがある。これら画像処理の価格設定は「時価」という。例えば写真修復の場合、1枚5,000円と一応決めてはいるが、処理内容とお客様との会話を考慮して「あまり予算がかけられないようだ」と判断すれば、値段を下げて対応する。それにより焼き増しなどが増える場合があり、まさしく「損して得とる」価格設定だ。加減が難しそうですねと聞いたら「そこは年の功」と笑っていた。

また、デジタル処理による様々な付加価値プリント提案も盛んに行っている。赤ちゃんが生まれたお祝いに餅を配る誕生餅が大分では盛んだが、餅にのし代わりに添える顔写真入りのプリントが好評という。お菓子屋さん



神河秀子社長

サンプルを置いてもらい受注する形式で、1枚30~50円(受注量によって変更)で、だいたい30~40枚、多い場合で100枚注文するお客様もいるようだ。

名刺もコンスタントに受注する付加価値プリント商品の1つ。お客様と話をしながら人柄を見て、デザインを作り上げていく。企業などの場合は会社の資料を持参してもらい、それをスキャンして画像を入れる。2、3種類の見本を作り、その中から気に入ったものを選んでもらう。ここまでやって、100枚2,100円という低価格で提供する。デザインが決まれば、即日納品が可能で、納期のかかる印刷屋に対して見事に差別化を果たしている。リピート率も高く、継続的に注文をいただく会社もあるという。

これらプリント商品を訴求するきっかけとなったのは年賀ポストカードだ。自家処理で行っている年賀ポストカードの余ってしまった専用ペーパーを有効利用するにはどうしたらいいか、というのがスタートだったという。年末の期間限定でなく、1年中需要のあるこれら商品にペーパー卸先の商社も興味を示し、誕生餅プリントについては大分県外のみでの使用を条件にテンプレートを提供した。神河社長の技術力の高さをうかがわせるエピソードだ。

「同時プリントが減れば、L判は減っていく。これからはデジタルで手を加えたものをアピールして行くべき。今は家庭でもプリントできる時代。お客様にできないことを提案していかなくては」と力強く語る。



誕生餅配布時にのし代わりに添えるプリントを提案

神河社長製作・処理の付加価値P。名刺、修復写真など高品質を低価格で

